

「会員短信 47」

「滑稽俳句にある徳」

竹下和宏

私は五十歳代から、我流で川柳を研究していた事がある。好きな川柳は、「飲んで欲し止めても欲しい酒を注ぎ」「そんなこと言うたか酔の恐ろしさ」である。

俳句は六十五歳で始め、本阿弥書店の「俳壇」で滑稽俳句協会を知って入会した。辞書に、俳句とは「俳諧の句、こっけいな句」とあることも知った。何だ、自然諷詠でなくても、自由に詠んで良いのかと思うと句づくりが楽しくなった。滑稽俳句を知って、心情的な広がりのある句も詠めるようになり、句材の幅も広がった。

漢字と平仮名を融合し、繊細で深みのある「やまとことば」は、外国語には訳せないものが多い。例えば、「曖昧」「行合」「間合」「分（ぶん）」「満更」「如才無い」「取り沙汰」「蕩（とろ）ける」などである。これらは、俳句に詠みたくても使いこなせないでいる。

いずれにしても、川柳、俳句に共通して心得るべきは、晴朗で快いこと、リズム感があることで、その上に気品と洒落があれば申し分ない。そして、決して湿らせてはならない。その点、滑稽俳句には、からりと健康的な笑いがあり、読者を元気づけるという徳をもたらす力がある。現代の鬱に滑稽俳句は貴重な存在である。

今後の課題は、「上品な笑いを誘う気品」を醸し出せるかで、このことをテーマに実作に取り組んでいきたい。